



# 大規模スポーツイベントにおけるレガシー創出プロセスと開催持続化：協働型ガバナンスの視点から

松崎, 淳

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2027-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8538号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482286>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

## 論文内容の要旨

氏 名 松崎 淳  
専 攻 人間発達専攻  
指導教員氏名 長ヶ原 誠

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

大規模スポーツイベントにおけるレガシー創出プロセスと開催持続化：  
協働型ガバナンスの視点から

### 論文要旨

#### 【第Ⅰ部 大規模スポーツイベントを取り巻く社会的・理論的背景】

本論文では、協働型ガバナンスの枠組みに基づき、大規模スポーツイベントの招致と開催準備期でのレガシー創出プロセスに着目し、イベントステークホルダーにより結束されるガバナンスがどのように機能するか。そして、COVID-19流行下において新会期決定に至るまでに、どのような意思決定プロセスを経て不確実な事象を対処し開催持続化を実現するのかについて検討を進める。本論文で協働型ガバナンスの視点をを用いたのは、広域行政組織自身が国際的な大規模スポーツイベントを招致、準備する中での困難や課題、イベントの開催持続化を実現する上で他のセクターとの協働を射程に入れることが必要と考えたからである。本論文では、ワールドマスタースゲームズ2021関西の招致期から新会期決定までの期間を対象に、開催地におけるレガシー創出プロセス及び不確実な時代でのイベントの開催持続化に関わる協働型ガバナンスの有用性について検討する。

第1章では、本論文の背景について概観した。また国際的なスポーツイベントに関する社会的・学術的な関心やイベントから、さらなる調査の必要性を明確にした。加えて、国際スポーツイベントの開催持続化を検討する方法について先行研究と理解とのギャップに基づき検討を行なった。

第2章では、本論文の重要な研究テーマとなる協働型ガバナンスとスポーツイベントレガシー、イベントの持続化に関連する既存文献について検討を行い、昨今の学術的な関心を整理するとともに国内外の関連文献にて提示されている知見を特定した。

第3章では、この論文で用いたリサーチデザインを示した。まず、研究の新規性及び理論的・社会的意義を述べた。そして研究の目的を導き出し、目的に関連する2つのリサーチクエスチョンを提示した。最後に、本論文の方法論として用いたケーススタディの選択基準とワールドマスタースゲームズ2021関西のイベント概要について示した。

## 【第Ⅱ部 イベント招致を契機としたレガシー創出プロセス】

第4章では大規模スポーツイベントレガシー研究の国際動向を定量的かつ体系的に整理することを目的にシステマティックレビューを実施した。PRISMA声明に基づきシステマティックレビューを行なった結果、昨今のレガシー研究ではレガシーを「残されたもの」という大会の評価として捉える視点から、イベント前・中・後に計画、行動される必要があるものとしてレガシーへの、より幅広いパラダイムシフトを起こしていることが明らかとなった。さらにレガシー創出に向けては大会組織委員会だけでなく国際スポーツイベント主宰機関、国際スポーツ連盟、国内スポーツ競技団体、国内スポーツ関連機関、レガシー専門機関など、さまざまなレベルのアクターによる「多層的」関与が必要となっていた。その一方で、そのような多様なアクターの関与や多様分野における制度や統治の原理をそれぞれの特徴やメリット・デメリットを勘案しつつ、どのようにして、それらのガバナンスを調整していくのかは新たな課題となっていた。したがって、本論文ではイベント開催前からレガシープランニングを実施し、レガシー創出に向けてイベントに関与する国内外のステークホルダーが参画している大規模スポーツイベントとして「ワールドマスターズゲームズ2021関西」を事例として設定した。また、これまでのレガシー研究およびイベントマネジメントの文献で検討される知見を整理すると都市機能が整っている政令指定都市を調査対象にしている傾向があったため、人口規模が5万人未満の小規模都市を調査対象として設定した。これまでのレガシープランニングに関する研究ではレガシーの計画について検討を進める際に概念枠組みを設定せずに考察を行なっている傾向が示されている。そのため、本論文ではレガシーの計画を分析する際には、経営学や社会学の領域にて概念の有用性が認められている枠組みを採用することとした。

第5章では、大規模スポーツイベントの開催準備期に着目し、広域開催地（12府県政令市）で形成された協働型ガバナンスの構造的・機能的特徴を明らかにし、イベント前レガシーの有効性について検討した。リサーチクエストンとして、「イベント前のレガシー計画はステークホルダーによってどのように管理されていたのか」、「レガシーネットワークガバナンスにステークホルダーネットワークの特徴はどのように埋め込まれたのか」、「レガシーネットワークガバナンスは、イベント前のレガシー計画としてどのようなプロジェクトを実施し、開催地域に成果を生み出しているか」以上の3つを設定した。研究ⅠではWMG2021のレガシーネットワークガバナンスは、大会準備期間から3つのネットワークレベルに位置する関係者が相互に連携し各セクターが大会運営とレガシー創出の役割を担っていることが明らかとなった。また広域連携という不確実性の高い状況下で開催前からセクターを超えたパートナーシップを形成しレガシーづくりを進めてきた。本研究では質的分析により10のレガシーネットワークガバナンスの構造的・機能的特徴が明らかとなった。研究Ⅱではレガシーネットワークガバナンスに含まれる分野横断的なパートナーシップについて定量的な分析により、各セクター間の関係性の実態を明らかにした。主要な結果として、イベントの準備段階では各レベル（関西広域連合、大会組織委員会、府県レベル、市町村レベル）の知識、資源、相互信頼と合意形成を活用した組織構造を形成していることが明らかとなった。

第6章では、大規模スポーツイベントの開催準備期に着目し、小規模開催地であるオリエンテering競技開催地で形成されるコミュニティ・キャパシティの形成過程を明らかにした。まず、「小規模開催地は大規模スポーツイベント開催準備期に、どのような過程でコミュニティ・キャパシティを形成したのか」「小規模開催地は形成されたコミュニティ・キャパシティをどのように競技開催準備事業に結びつけているか」「小規模開催地にとって大規模スポーツイベントを活用したコミュニティ・キャパシティ形成に必要な条件（仕組み）は何か」の3つのリサーチクエスチョンをもとに論を進めた。結果、第一に小規模開催地でのレガシープランニングにはStage1（招致期）、Stage2（開催地選定期）、Stage3（開催準備期）の3つの段階にて各段階で形成されたキャパシティが次の段階のレガシー創出に向けた準備事業に関連していることが明らかとなった。第二に小規模開催地は長期的なスパンで開催自治体を中心に県競技団体や県教育委員会と連携を取り競技開催に必要なリソースを確保していることが明らかとなった。小規模開催地はレガシープランニングの際に同一競技を開催する市町と連携体制（A市・B町・C町）の構築による会合の場を設けることにより、それぞれの市町で生じた問題点・改善点を報告し合い3市町合同の準備事業を実施することで知識・技術の交換からリソースを活用する手法を学ぶことを容易にすると考えられる。第三として、「関西広域レベル」「開催県レベル」「開催市町レベル」での対話の仕組み開発はイベント開催準備期において、イベントそのものが生み出す価値を地域住民への生涯スポーツ振興に限定せず産学官民といった多様な主体者に対して参画の幅を広げ組織間のコミュニケーションの機会、ネットワークの形成の促進に寄与することが示唆された。

### 【第Ⅲ部 不確実な状況下でのイベントの開催持続化】

第7章では大規模スポーツイベント主催組織を対象に不確実な状況下での開催判断過程について検討を行なった。リサーチクエスチョンとして、「大規模スポーツイベント延期の開催判断を下す意思決定者はどのような組織的な特徴をもとに開催判断の選択肢を設定するのか」「イベントステークホルダーはCOVID-19発生を機に何についての不確実性を認識しているのか」「大規模スポーツイベント主催組織は意思決定に関わる不確実性を抑制するためにどのような管理策を講じるのか」以上の3つを設定した。結果、主催組織および関連ステークホルダーはイベントの開催方針策定、競技運営、イベント運営に関わる13項目の不確実性を認識していることが確認された。さらにイベント開催方針策定に関わる不確実性については主催組織である大会組織委員会が発生抑制、対処手法を講じる傾向がある。一方で中央競技団体や府県政令市実行委員会は競技、イベント運営に関わる不確実性の対処に関与し対処策を講じることが示された。WMG2021は国内外からの目標参加者数を5万人と設定し、イベント基本理念にも「一人ひとりの挑戦」「多様な交流の和」「地域の独自性」「日本の伝統・文化を世界に発信」と掲げている。そのため、イベント主催者はリサーチクエスチョンの2つ目として設定したイベントステークホルダーが認識する不確実性に関する情報収集を行うことでCovid-19流行下にてイベントを開催した際に生じる不十分な理解と未分化な選択肢の確実性を高めていたと推察される。今後の研究展望として、開催判断に関わる意思決定（第2次）に関わる新会期決定期までのイベント主催組織内外の情報を収集し分析に組み込むことが挙げられる。これらの情報は第1次の期間にて主催組織に生じた不確実な事象をどのように意

意思決定者が予測可能な事象へとコントロールしたのかを問うにあたり、より詳細なメカニズムに迫ることを可能とする。

第8章では新型コロナウイルス感染症拡大を機とした、不確実な状況下での大規模スポーツイベントの新会期決定に関わるIMGAとWMG2021関西組織委員会間での協働プロセスについて検討を行った。協働プロセスについては、協働プロセス4つの次元（対面での交渉・信頼の構築・プロセスに対する取り組み・理解の共有・中間成果）着目しながら、組織の声明や記述的データを対象に演繹的に分析を行なった。結果、協働プロセスの起動条件としては 関係者が相互の協力によって何を達成したいかという目標やビジョンを共有し、過去の協働経験が影響を与えるといえる。次に新会期決定に向けたガバナンスの構築による協働プロセスの循環に対する示唆である。組織委員会とIMGAとの協働プロセスについて分析した結果、対面での交渉、信頼の構築、プロセスに対する取り組み、理解の共有、中間成果に関わる記述的なデータには大会理念の尊重と理解が相互一貫していたことが明らかとなった。WMG2021の新会期決定に向けて、組織委員会とIMGA間では新会期決定に関わる協議の中で「WMG2021関西 国内・国外登録数の推移」に関する議題を設定していた。加えて、感染症流行による国内・国外からの新規登録者数の推移やキャンセル数の推移を相互に共有することは大会理念の実現に向けた明確かつ透明性のある手順の一つになっていた。不正確な情報や矛盾する情報が飛び交う社会情勢の中において、組織委員会とIMGAが国際的なスポーツイベントの新会期決定に向けては、協働プロセスの循環が不可欠であるといえる。第7章では主に組織委員会がイベントの開催判断を行う際に講じた不確実性の管理策について検証を行なったが、第8章では組織委員会と国内のステークホルダー間での協働プロセスに加えて、国外のイベント主宰機関との過去の協働経験や価値共有による信頼関係の構築から新会期決定に至るメカニズムを明らかにした。

#### 【第IV部 総合考察】

第9章では、研究知見のまとめとして、第4章から第8章までの研究知見について整理した。次に論議としては、本論文の目的を達成するために設定したリサーチクエスション（1）イベントレガシー創出に向けて、ステークホルダーは困難や課題を克服するために、どのような仕組みや能力を形成したのか、リサーチクエスション（2）イベントの開催持続化を目指す上で、ステークホルダーは、どのような不確実性を認識するのか。また、どのようにイベントの開催理念を共有し、意思決定や合意形成に至るのか、上記2つのリサーチクエスションに対しての論議を行なった。

本論文の理論的貢献として、Shilbury et al. (2016) が示した協働型ガバナンス論の研究課題の克服を目指した。具体的には、大規模スポーツイベントの招致段階から新会期決定段階に着目し、アクターが知識やリソースの共有化を図り、リーダーシップを発揮するための能力の開発や準備体系について、組織論の観点から検証を行なった。加えて、不確実な状況を打破するためにステークホルダー同士が、どの程度、共通のビジョン、ミッション、価値観を持ち共有を図っているのか。また、どのような意思決定、合意形成プロセスを形成しているのかについて理論的見地を獲得した。

本論文の社会的貢献は次に示す3点である。1点目としては、大規模スポーツイベントレガシーの国際動向についてシステムティックレビューをもとに体系的に知見を整理し、望ましいレガシーの

成果は支援者となるガバナンス体制の構築、資源、構造やプロセスをなくしては起こり得ないため、レガシーの計画の中でこれらの要素を効果的かつ効率的な管理策に関する学術的な支援の必要性について提言できた点である。2点目としては、国境を越えた関係者間で構築される国際スポーツイベントの展開に向けては組織間の連携、すなわちステークホルダー間の関係を効果的かつ戦略的に管理する必要性を示せた点である。国境を越えたステークホルダー間でのガバナンスの管理、そして、大会の招致決定の際に掲げた理念について、開催準備段階、開催段階を通じて認識、共有できる制度基盤の構築が求められる。3点目としては、大規模スポーツイベントの広域連携開催に向けて、レガシー創出ガバナンスの仕組み及び不確実な状況下での意思決定体制を明らかにした点である。

広域連携によるスポーツ振興を議論する際には、事業の効率化や有効性に着目される背景があり、実際に本論文の中においても、スポーツ振興機関や地方自治体、地域スポーツ団体等が一体となりイベント価値を共創する仕組みが確立されていた。その意味で本論文にて対象となった「ワールドマスターズゲームズ2021関西」開催に向けたレガシー創出と存続化に関する現象は、全ての時代、全ての国際的なスポーツイベントに当てはまる普遍的な問題であると言える。しかしながら、突如として発生しする感染症の流行や国家間紛争の発生により、社会情勢が大きく変貌しつつ状況の下で、これらの課題に立ち向かう際には、広域連携としての制度的な規範や意思決定のあり方についても臨機応変な対応が求められる。

## 論文審査の結果の要旨

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |                                                       |     |       |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|-----|-------|
| 氏 名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | 松 崎 淳                                                 |     |       |
| 論文題目                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   | 大規模スポーツイベントにおける<br>レガシー創出プロセスと開催持続化：<br>協働型ガバナンスの視点から |     |       |
| 判 定                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | 合 格・不 合 格                                             |     |       |
| 審<br>査<br>委<br>員                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | 区 分                                                   | 職 名 | 氏 名   |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 主 査                                                   | 教授  | 長ヶ原 誠 |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 副 査                                                   | 教授  | 高見 和至 |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 副 査                                                   | 准教授 | 秋元 忍  |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 副 査                                                   | 教授  | 片桐 恵子 |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 副 査                                                   | 准教授 | 原田 和弘 |
| 要 旨                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |                                                       |     |       |
| <p>本審査委員会は、令和5年2月3日に論文審査及び最終試験を行った。審査の結果、次のような結果を得たので報告する。</p> <p>本論文は、ワールドマスターズゲームズ2021関西の招致期から新会期決定までの期間を対象に、開催地におけるレガシー創出プロセス及び不確実な時代でのイベントの開催持続化に関わる協働型ガバナンスの有用性について検討することを目的とした。本論文は九つの章で構成される。</p> <p>第一章では、大規模スポーツイベントを取り巻く社会的・理論的背景について概観した。また、本論文の構成について説明を行った。</p> <p>第二章では、協働型ガバナンス、スポーツイベントレガシー、イベントの開催持続化に関する国内外の研究動向について体系的に検討を行った。</p> <p>第三章では、本論文の目的を達成するためのリサーチクエスションの設定と共に、論文全体の研究枠組について整理を行った。</p> <p>第四章では、大規模スポーツイベントレガシー研究の研究動向について、システマティックレビューを通じて定量的かつ体型的に文献情報を分析し、本分野における、これまでの研究成果と今後の課題を提示した。</p> <p>第五章では、大規模スポーツイベントレガシーに関わるガバナンスの構造的・機能的特徴を明らかにすると共に、関西12府県政令市で実施されたプレ・イベントレガシー事業を定性的かつ定量的に分析することによりガバナンスの有用性について検証を行った。イベントの準備段階における広域連携ガバナンスの実態に</p> |                                                       |     |       |

について、各自治体における知識、資源の共有化を図る仕組みについて、ネットワークガバナンス論の視点から考察を行った。

第六章では、大規模スポーツイベント招致を契機に小規模開催地で形成されるコミュニティ・キャパシティに着目し、ローカルレガシーの創出過程について検討を行った。小規模開催地におけるレガシー創出に向けては、招致の段階から各開催地の行政担当者が競技運営に関するスキルの獲得、競技団体有識者間の交流、地域活性化情報についての共有化が促進されていることを実証した。

第七章では、新型コロナウイルス感染症流行下における大規模スポーツイベントガバナンスに着眼し、イベント開催判断に関わる組織の不確実性に対する管理方法について具体的な内容分析を行った。主催組織および関連ステークホルダーはイベントの開催方針策定、競技運営、イベント運営に関わる13項目の不確実性を認識しながら、その対処として主にイベント理念の実現を中核に、開催地におけるステークホルダーの便益最大化とそのニーズ情報を段階に集約し、組織全体の存続努力を示す具体的プロセスを明らかにした。

第八章では、不確実な状況下での大規模スポーツイベントの新会期決定に組織間の協働プロセスがどのように構築されているのかについて合意形成とその背景に着目し分析を行った。分析の結果、イベント組織委員会と国際マスターズゲームズ協会における、新会期決定に関する合意形成への阻害要因の存在と共に、それらの阻害要因を克服していくための両者間での対話プロセスに加え、イベント招致以前からの協働経験とイベント価値の共有を基盤とした新たな関係性の構築による決定プロセスについて具体的に検討した。

第九章では、総合考察として一連の研究結果の考察とまとめ、学術的貢献と社会的貢献、研究の限界と将来展望が述べられた。特に、これまで見られなかった国際生涯スポーツイベントの複数の開催地ホストを同時に追跡しながら、開催前のイベント準備期における様々な地域活性化効果とその組織的要因を解明し、さらにイベント延期に伴う関係組織とレガシー創造に向けた再起動のプロセスについて生じた事象を縦断的に分析した点が学術的にも評価される。

以上を踏まえ、博士論文の5つの評価基準である、「独創性」「専門性および学術性」「実証性」「論理性」「先行研究・資料の適切・厳密な取り扱い」を充足していると認める。

また、学位申請者は、筆頭著者として本論文に直接関わる下記のレフェリー付き学位論文2編を発表しており、博士学位申請に関わる参考論文の要件を満たしている。

- 1) 国際生涯スポーツイベントにおけるコミュニティ・キャパシティの形成過程に関する研究：小規模開催地に着目して。生涯スポーツ学研究, 17 (2) : 1-16. 2021 年
- 2) 不確実な状況下での国際生涯スポーツイベントの開催判断過程の検討。生涯スポーツ学研究, 19 (1) : 13-25. 2022 年

以上より、本審査委員会は、学位申請者の松崎淳氏が、博士（学術）の学位を授与されるに足りる十分な資格を有するものとして認める。